彫刻の調査と研究経過

美術工芸研究室・彫刻

興正菩薩叡尊の研究

この興正菩薩叡尊の研究は、前にも記したように昭和30年以来ずつと続けてやつているものであるが本36年度においては主として叡尊の本拠の西大寺（奈良市西大寺町）と、彼の弟子忍性や性海などと関係のある元興寺小塔院（奈良市西新屋町）と、伊賀地方における真言律宗の中心であつた天童山無量寿福寺（上野市下神戸）その他を調査した。

無量寿福寺においては、その鎌倉中期の文永初年（1264）頃における律僧行然による創建をあまり隔らない頃に造られたと思われる珍しい形式の板四天王像と、ずつと後世の江戸時代のものながら宝暦7年（1757）の銘がある興正菩薩叡尊像などを調査した。この前者の板四天王像とは、全長2尺78寸ほどの細長い板をくり抜いて神将形の概形を作つたものであるが、その上方には円形の頭光、下方には踏鬼を作り、その神将形の細部などは胡紛地彩色で描かれたものである。しかもその板の表と裏とにそれぞれ異つた姿の神将形を描いて、2枚の板だけで四天王像をあらわしているのは、他にあまり類例のない珍しい作りに成るものといわなければならないだろう。また叡尊像はいかにも江戸彫刻らしい形式的な肖像で、その表現などもあまり力強いものではないが、この像が江戸中期の宝暦7年（1757）にこの神戸地方の森光明真言女人講の人々が中心になつて造られたことが明らかにされるのは、やはりこの頃における真言律宗の一つの在り方を示すものとして、注意をひく。

なお叡尊研究には、まだまだ調べなければならないものがかなり数多く残されているのであるから、今後ともこの研究だけはできるだけ押し進めていきたいと思つている。

宝山湛海の研究

宝山湛海が江戸中期に生駒山宝山寺を中心として、真言律宗による不動信仰と聖天信仰とを大いにひろめた一代の傑僧であることは人のみなよく知るところであるが、彼がまたその信仰を強くおし進めるために、みずから不動明王その他の仏菩薩像をあるいは彫刻にあるいは絵画にものしたものが、かなり数多く伝えられているのみならず、それ等の彫刻や絵画などの出来栄えが、その頃の専門仏師をはるかにしのいで、実にすばらしいものに仕上げられているのであるが、それは何んといつても彼の宗教家としての熱烈な意慾と真摯なものの考え方によるものといわなければならない。そこで当研究所においては、前々からもこの江戸時代としてまつたく特異な存在であつた宝山湛海に注意の目を向けていたのであるが、たまたま昭和39年がちようど湛海の二百五十年の遠忌に当るのを期して、それまでに彼の輝しい業蹟の数々をまとめて、「宝山湛海伝記集成」1冊を編集する

宝山寺不動明王像

ために、一方に宝山寺からの要請もあつて、この36年からこの宝山湛海の研究をはじめたわけである。そしてその手始めとして、彼の本拠宝山寺（奈良県生駒郡生駒町）をはじめ、奈良附近の西大寺（奈良市西大寺町）、常光寺（奈良市押熊町）、唐招提寺（奈良市五条町）、東大寺（奈良市雑司町）、元興寺極楽坊（奈良市中院町）、法華寺（奈良市法華寺町）等や、彼の生誕地に近い正源寺（三重県津市一色町）、神宮寺（津市納所町）等や、また彼と何かと関係のあつた千手寺（大阪府枚岡市石切町）、宝幢寺地蔵堂（枚岡市豊浦町）円明寺（岡山県英田郡大原古町）等の調査をおこなつて、それぞれかなりの収穫をあげた。否、湛海のことは何んといつても時代の隔りが少いので、彼や彼の弟子達に繋りのあるところでは、必ずといつてよいくらい何かしら湛海の資料が見出されたのであるから、今後しばらくその基礎調査を続ければ、その成果には期して待つべきものがあるだろうと思われる。

茨城県下の彫刻調査

茨木県教育委員会及びいはらき新聞社の要請によつて、昭和36年3月23日から25日にわたる3日間に茨城県下の主要な彫刻類を見て廻つたのであるが、その大要は次の通りである。

円福寺（東茨城郡茨城町鳥羽田）
　阿弥陀如来坐像（応長二年修理銘）
薬師寺（東茨城郡常北町石塚）
　薬師三尊像
西光庵寺（東茨城郡金砂郷村下利員）
　薬師如来坐像
楽法寺（真壁郡大和村本木雨引山）
　伝延命観音立像（馬頭観音）
　毘沙門天立像
　不動明王立像
観音寺（下館市中館町）
　伝延命観音立像
西念寺（猿島郡岩井町辺田）
　阿弥陀如来坐像
妙安寺（猿島郡岩井町三村）
　聖徳太子立像（伝火伏せの太子）
　聖徳太子絵伝　4幅
　聖徳太子伝記　2巻
常福寺（土浦市下高津）
　薬師如来坐像
浄真寺（土浦市横町）
　銅造阿弥陀如来立像（弘長元年銘）
満願寺（稲敷郡東村阿波崎）
　銅造如来形立像
長勝寺（行方郡潮来町潮来）
　阿弥陀三尊像
福泉寺（鹿島郡大洋村大蔵）
　釈迦如来立像（清涼寺釈迦）
満福寺（行方郡玉造町羽生）
　阿弥陀三尊像（来迎弥陀）
善重寺（水戸市酒門町）
　聖徳太子立像

この中でちよつと注意しておきたいのは、妙安寺の聖徳太子像（木造彩色、像高3尺5寸）で、この像はいま寺伝に火伏せの太子などといわれて、その右手に柄香炉、左手に杉の小枝をもつたものであるが、これはおそらくこの寺の正徳3年（1713）における火災後に付けられたと思われる俗名であつて、もともとはやはり伝十六歳の孝養形像である。その作りにやや鄙びた粗野なところもあるが、なかなかしつかりとした出来栄えを示して、あるいはこれがこの寺の鎌倉中期の天福元年（1233）という中興をあまり隔らない頃に造られたものではないかとも考えられる。

妙安寺聖徳太子像

（小林　剛・長谷川誠）